司由衣詩集『魂の奏でる音色』に寄せて

運命にあらがい希望を見いだす人

鈴木比佐雄

1

司由衣さんの詩行には、決して忘れることの出来ない命あるものの肉声が宿っている。その独特のリズム感は、司さんの肉体を通した固有の存在の切ない発語に宿っている。また司さんは自分の人生の時間を振り返り曝け出すことによって、読み手の魂の深淵に真実の言葉とは何であるかと、問いかけてくるのだ。司さんは東京に生まれ、父の敷いたレールの花嫁修業を拒否して家出し、京都で呉服店を経営する夫と恋愛結婚し二人の子供も産まれて幸せに暮らしていた。しかし夫が急死して経営する呉服店が破産し、財産を処分して会社の負債を清算し、二人の小さな子供を抱えながら孤軍奮闘してきた。生まれつき丈夫ではない身体も、蝕まれていき死を宣告された時もある。それでも司さんは決して諦めないで自らの宿命にあらがって、不屈の魂を奮い立たせようと詩作を続けてきた。司さんの発語は、てらいなく存在の極限のような場所から言葉を放出させてくる。読み手をはらはらさせて自らも作者に乗り移ってしまいそうにさせる不思議な言葉の力がある。そんな詩作をしている司さんが第二詩集『魂の奏でる音色』を刊行した。司さんの詩の魅力を紹介したい。

二〇〇六年に刊行された第一詩集『西境谷団地から』は、二十八篇から成り立っている。冒頭から四番目の詩「花折れ」を読むと司さんの独特な感受性が読み取れる。

花折れ

折りとってきた桜の小枝を
ガラスコップに挿してしばらく見入っている

と　花びら一輪はらりと落ちて
水面に浮かんだ

雄蕊の蘂粉の紅黄色
花心の奥の膨れた子房
薄紅さす花唇はハートの形に似て
寸分の乱れもない五弁の花びら
そのこまやかな綾模様は
桜木の雄々しい姿から窺い知れない可憐さで

つい先ほど　大型書店の三階から
その後寄り道した高島屋のガラス窓からも
そして通り抜けてきた歩道橋からも眺めた
境谷中通りの桜並木
その爛漫の花に見惚れて思わず手折った一枝

それでもガラスコップに浮かんだ
花の潔さは

誰をも咎めず　厭わず
時の経過を　その仕打ちを受け入れている

ふと思いが過る
かつてわたしも　いま目にした雄々しい桜木の
奢りの春を謳歌している花の一輪だったんだと
誰かに手折られなくても
はらはらと落花のときはかならず来ることを—

多くの日本人は花見に行き、桜の美しさを愛でて、しばらくすると来年まで桜を忘れ去ってしまうだろう。ところが司さんは桜の美しさをもっと身近にしようと桜の小枝を手折ってきて、その小枝を眺めながら花びらがガラスコップの水の上に落ちかかるのをじっと見守るのだ。美しい花が散って消滅していく時間を愛おしんでいる。それだけでなくその美しい存在が消滅していく過程を自分の存在にもなぞらえていく。女性として最も

美しい時間であったころの存在を想起しながら、その美しさが移ろっていく人生を回想している。生気に満ちた美が枯れた存在へと向かう時間の流れをどこか抱きしめているような思いが伝わってくる。そんな意味で司さんの詩は、その瞬間の情景を物語りながらも、実は存在者や存在物の固有の時間の究極を見詰めているような二重の視線があると思われる。それゆえ花鳥風月の省略の美意識の感性の持ち主には、冗舌すぎる詩法であると思われるかも知れない。しかし詩の魅力は省略の美の価値観に収まるものではない。もっと詩は根源的に自由な表現の試みなのであり、司さんのように内部から突き上げてくる詩法こそが詩の本来的な魅力を引き出してくれるのだと考えられる。次に司さんの暮らしの中で他者に対して痛切に感じたことを記した詩「売家の庭」を読んでみたい。

売家の庭

三階のベランダから売家の庭が見える
境谷中通りに沿って石垣のある角家の庭だ
そこのおんな主とは入居時からの顔見知りで
なんどか立ち話もしたことがある
庭いじりがなによりも好きらしく
いつもお洒落な長めの靴を履き
鍔広の帽子の下から瓜実顔が覗いていた
その作業に打ち込む姿はしゃがみこんでのそ
　れではなく
半ば腰を浮かせた甲斐甲斐しさで
さぞしんどいだろうに頬辺に笑みさえ湛えて
会うたびにさらに笑みをひろげて口癖のよう
　におっしゃるのだった
—春が来るのが待ち遠しい…と
最近洩れきこえてきた噂では
長びく不況でせっかく手掛けた事業が行き詰

まり
家を担保に銀行から借金
けれども負債が増えるだけで赤字の穴埋めに
　ならず
切羽詰まって家を売りに出したが
買い手にも恵まれず
ついには競売にかけられ　このほどようやく
　落札したとか…
五年前　わたしの身の上にも同じような
　ことがあった
壬生(みぶ)寺に近い呉服屋の三代目だったわた
　しの夫が死んだ途端
手の裏を返した輩が裏庭からずかずかと
　踏み込んできて
「かんにんやで　取り立てが俺の仕事やし」
「払ろてや！　あした店の支払日やさかい」
「よもやわたしの代で老舗は潰せまへん
　よってに」
口々に責め立てられ　追い詰められて
ええいままよ！　さっさと家を売り払って
　清々と…
あと半月ばかり持ち堪えたら
薄い紙のような苞から淡い黄緑色の春蘭が咲
　いて
さぞやおんな主の心も癒されたろうに
今は　折られ束ねられた春蘭の遺体に
苞からさまよい出た花の精がとりすがってい
　る
まだ覚めやらぬ寒い朝に

司さんは家を失う知人の悲しみを「売家」の張り紙から感じ取る。経済社会の中で敗れ去った者であっても心までは敗れ去ってはいないのであり、その敗れ去る美学のようなものを伝えている。自

宅が競売にかけられる隣人への同情心にかられて、自らも夫の会社の負債で家を失った経験をした司さんだからこのような詩がかけたのだろう。「売家」の張り紙一枚でも一篇の詩が生まれてくるのだ。花作りが好きだったおんな主との交流を書き留めることが司さんの人間観であり人生観なのだろう。

また司さんの詩のテーマは、生老病死を抱えた人間存在を直視した深刻なものだが、どこかその一途な真面目さを相対化して笑い飛ばすようなユーモアやほろ苦い人生につながるペーソスも感じさせてくれる。たとへば、詩「ブランドバッグ」などだ。

ブランドバッグ

嫁いで間もない娘が
お里帰りに「これお古やけど―」

▽印のついたショルダーバッグを置いていった
先日
阪急・桂の駅でばったり会ったとき
娘の肩にかかっていたあのバッグだ
そのとき　バッグの中からさり気なく取り出
　された胡瓜
「これ五本で百五十円　安いでしょ　二本あげ
　る」
覗くと　他に　ピーマン　レタス　榎茸　玉
　葱などなど…
欲しくともとても手が出そうにないブランド
　品が
娘には買いもの袋並みに扱われていたなんて
ファスナーのつまみと
細い肩ひもに革があしらってある

「惜しみなく使ってね

タンスの奥にしまいこんだりしたら
　カビの餌になるのがオチでしょ」

そうだった
惜しみなく身を削って
育児に学資にそそぎ込んだわが愛娘
気がついたらよその男にそっくり持っていか
　れて
おあとには骨と皮しか残っていないわが身柄
今更ブランドが似合う筈もなく
とは言いつつひょいと持ち上げ肩にかけると
これがまことに軽くしなやかにフィットする
それじゃ頂くわよ　ポケットの数も便利よく
　て
以来フル活用
お古でもブランドですから　と
ご機嫌よろしきときは▽印を外側に向け
気鬱に落ち込んでいるときは▽印を内側に
気分次第で使い分け
中身はというと　なんともはや
でてくるわ　でてくるわ
椎茸　にんじん　トマトに小松菜　お漬物

私はこの詩「ブランドバック」を読んでいると、嫁いだ娘の母への深い愛情が胸に伝わってくる。偶然に司さんと駅で出会った時に、きっと司さんは娘さんのブランドのショルダーバックに生鮮食品が入っていたことに驚き、羨ましいと思ったのだろう。そのことを知った娘は育ててくれた感謝の気持ちで自分の大切なブランドバックをプレゼントしたのだ。母にもブランドバッグで野菜などを毎日買って、いつまでも健康でいて欲しいという気持ちを込めたのだろう。大切なお古だからこそ気持ちが伝わってくる。司さんもきっと娘の気持ちは分かっているのだが、分からない振りをし

て娘の提案に従ってブランドバッグを買物袋にしている。何か本当に心のこもったプレゼントとはこのようなものかも知れないと感じさせてくれる。またこの詩は、団塊の親子の価値観の違いも浮き彫りにしてくれてとても興味深い。

2

新詩集『魂の奏でる音色』には三十七篇が収録されていて、四章に分けられている。テーマとしては第一詩集の様々な課題をもっと深めた詩集といえるだろう。第一章「花の一瞬」十篇は、第一詩集の詩「花折れ」のように花の儚い命の中に人生を透視してしまうのだが、それを超えて希望を見ようとしている詩篇群だ。冒頭の詩「花の一瞬」を見てみたい。

花の一瞬

有用のもの
無用のもの
振り分けながら
思う

ラインを飛び超えなければ
次のゴールは見えない
過ぎ去った日の出来事は
みんな棄てたね
袋詰めにして
ほら　見てごらんよ
惜しみなく切り捨てた枝や葉の下から
早くも咲きかかる
花の一瞬がある

桜の枝の花びらを鑑賞しながら人生を感じていた詩「花折れ」とは違い、詩「花の一瞬」では、不本意な過去を抱えながらも自分の棄てた過去の

時間の中から「早くも咲きかかる／花の一瞬がある」という。きっと司さんにとって詩的な想像行為である詩こそが「花の一瞬」なのだろう。司さんの詩作に賭ける意気込みが伝わってくる詩だ。

次に詩「秋の光が咽喉を過ぎる」を紹介したい。

秋の光が咽喉を過ぎる

突然
投げ込まれて
思い知るのだ
寄りかかれるものは何もない
甘えもない
鼻水はおろか涙も出てきやしない

「肺に気になる濃い影があります
（死の影の大きさは約五ミリ強）
明後日ＣＴ造影をやりましょう」

「わたしを生かすの？
それとも殺すの？」
「結果は後日聞きに来てください」

洗濯機も　炊飯器も　食器棚も
テリトリーを失い
食べ物はろくにのどを通らず
日がないちにち　ぽつんねんと
医師の三分間診療とダイアローグする

「神さま」
人しれず祈っている
鳶色のカーテンの窓を開けて
深呼吸をする
今日のことが幻のように
秋の光が咽喉を過ぎる

死は

ほんとうに来るのだろうか
わたしは終わらない
いつの日であろうと

肺に濃い影があり精密検査を受けることになった司さんは、一人死の恐怖にさいなまれて思い悩む。この詩行の切迫感が司さんの詩の特長的なリズム感だ。その悩み思い巡らした果てに「秋の光が咽喉を過ぎる」という美しい詩行が奇跡のように生まれてくる。そして最終連の「死は／ほんとうに来るのだろうか／わたしは終わらない／いつの日であろうと」と有限な時間を生きる人間が無限の時間を生きようとする願望を赤裸々に語るのだ。

第二章「魂の奏でる音色」九篇は、この詩集の中で司さんが日々の暮らしで最も切実な問題を直視して記した詩群だ。理系の大学を卒業し就職もした息子さんは、仕事に適応することが出来ずに、精神を病み仕事を止めて家に閉じこもる日々だという。母である司さんは、息子を理解しようとその精神世界に近づいていく。その困難な試みがこの章の詩篇群だ。司さんは決して息子を突き放さないで粘り強く息子が強迫されている精神的なこだわりの解明を試みる。しかしその度に弾き返されて失望するのだが、また息子の病んだ世界の負債を背負ってあげたいという一途な思いでそれは繰り返されるのだ。しかし息子を溺愛するのではない。一人の他者として一人の自立した人間として、息子に嫌なもの汚れたもの裏切りだけを見るのではなく、自分の中の素晴らしい「魂の奏でる音色」を聞き取って欲しいと伝え続けている。私は司さんの内面には、温かい母の愛と厳しい父の愛の両面があり、病んだ息子にその両面で接していると読み取れるのだ。

第三章「遥かなる人」十篇は、亡くなったご主人や尊敬する人たちへの恋情に満ちた詩篇だ。苦

労続きの司さんだが、その中でも様々な素敵な出会いがあり、その結果としてその他者たちに感謝を込めて詩に記したのだろう。

第四章「水色のカーテンのある窓」八篇は、父との葛藤をいかに乗り越えようと格闘してきたかを記したり、自己の運命を神様に注文付けたりするユニークな詩篇、また死んだ夫、嫁いだ娘、精神を病んでいる息子を含めた家族への感謝の気持ちを記した心に染みてくる詩篇群だ。最後の詩「魂の奏でる音色」を引用したい。詩の愛好者だけでなく、いま理不尽で過酷な運命にあらがい、希望を棄てない人たちにぜひ読んで欲しいと願っている。

魂の奏でる音色

洞窟めいた狭い空間を
ぼんぼりの灯にみちびかれ
じぶんの影に揺らめきながら
仄暗いテーブルにたどりつく
（遠い場所に来てしまった

妖艶な少女が近づいて
「何になさいますか？」
カフェラテと答えた
ほかの仲間が注文したのは
スコットランド産の強い酒か
グラスに注がれた液体は少しばかりの
まったりとした琥珀色をしていた
（小鳥の悲しみは痛いほどにわかっていた

「少し飲む？」
女仲間のNさんの心根が身に浸みた
突然　カラオケが鳴りだして
Nさんが歌った　♪「ラストダンスは私に」

コントラルトな歌声は
（夜深けに歌う小鳥のレクイエムに似ていた

いつのまに終わっていたのだろう
いきなりカラオケが鳴りだして
男仲間のTさんが歌った　♪「有楽町で逢いま
　しょう」
フランク永井そっくりの声色が
わたしを幻のオーロラへ誘った
ぼんぼりの灯に映しだされた
男の影にぐいと魅せられ
熱る頬をそむけた
（小鳥のいる場所に戻ろう

世の中という洞窟に
灯りを点すのは
アガペー[*1]でも　イエスでもない

ましてタナトス[*2]ではない
エロス[*3]という魂だ

君という小鳥が
空を飛べないのは
空が汚れているからでもない
翼を傷めているからでもない
どこへ向かって生きるか
魂の奏でる音色を聞こうとしないからだ

＊1　神の愛
＊2　フロイトの言葉で「死の本能」
＊3　プラトンの言葉「美のイデア」

司由衣詩集『魂の奏でる音色』栞解説文
鈴木比佐雄
コールサック社　2012